中国リハビリテーション研究センター訪問報告書

自立支援局 総合相談支援部
支援企画課　池川 優作

1. はじめに

国立障害者リハビリテーションセンターは、平成 23 年から中国リハビリテーション研究センターとの間で協力協定を結んでおり、専門職や研究職の技術交流を行うことを目的として、職員の派遣を行っている。今回、私は事務官という立場で、作業療法士である中村有志氏とともに現地を訪問し、先方の職員の方々と意見交換を行った。そのことについて、以下に報告を行う。

2. 日程

平成 30 年 3 月 12 日(月)　出国
13 日(火)　中国リハビリテーション研究センター視察及び意見交換
14 日(水)　中国障害者体育運動管理センター視察
15 日(木)　帰国

3. 報告

【中国リハビリテーション研究センター視察及び意見交換】

中国リハ視察では、午前中にセンターの概要を紹介していただいた後、作業療法分野を中心にセンター内部の見学をさせていただいた。内部を見学していく中で、まず、リハビリを受ける利用者の方々が日本と比べ、非常に多いという印象を受けた。2016 年末の時点で、中国本土の人口は約 13.8 億人、北京市だけでも約 2100 万人である。その一方で、日本の人口は約 1.2 億人である。中国の人口の方が約 11.5 倍程度多いことを考慮すると、日本のリハセンターよりも利用者の方々が多いと感じるのは何ら不思議ではないはずだ。しかし、周りをよく見てみると、利用者の方々が多いだけではなく、その利用者のご家族がリハビリの近くで寄り添っている光景が多く見受けられた。日本のリハセンターではあまりこの光景をみることがないため、非常に印象深かった。

午前中の見学が終了した後、午後は中国リハの OT の方々との意見交換会の時間を設けていただいた。日本へ留学の経験のある黄さんをはじめとした OT の方々と、中国リハと日本のリハセンターでの作業療法の在り方や国の障害者政策に関することなど幅広く意見交換をすることができた。その中で、午前中の見学の際、特に印象に残っていた、リハビリ中に利用者の家族が本人の近くで寄り添っている点について、質問をさせていただいた。利用者の方に実際にリハビリを受けていただくのと同時に、ご家族にリハビリの説明をしながら今後の指導をしていることがよくあるとの回答をいただき、非常に印象に残っている。実際のリハビリ現場での説明や指導は、ご家族にとって、利用者本人をセンターへ任せる際の安心材料にもなっているのではないかと個人的に感じることができた。

【中国障害者体育運動管理センター視察】

中国国内では 1997 年以降に、19 の市や省に 31 の国立のスポーツセンターが設立され、地域の特性に応じたスポーツ活動の推進に寄与してきた。

その後、障がいを抱えた方々のスポーツ活動を推進すること等を目的として、中国障害者体育運動管理センターが設立された。この施設は、中国国内の障がいを抱えた方々が競技としてのスポーツを行う場を提供し、それらを支える様々な設備を多く取り揃えている。

今回訪れて最初に抱いた印象は、率直にセンター全体が広大だったということである。面積は 238.235 ㎡であり、実に東京ドームのグラウンドの約 18 個分の広さを持ち合わせていたことに驚きを隠せなかった。センターにはトレーニングジムをはじめ、競技用プール、屋内外に陸上競技場を持ち合わせるなど、障がい者のあらゆる競技スポーツをサポートできる設備を取り揃えていた。事前の知識がなかったとしても、施設を見学すると、中国が国を挙げて障がい者スポーツを積極的に推進していこうとしていることを自然と読み取ることができるほどであった。また、北京パラリンピックをきっかけとして、障がい者スポーツの推進により一層の拍車がかかったというお話も聞くことができた。

中国障害者体育運動管理センターは、北京だけではなく、中国国内の様々な障がい者スポーツ活動の運営に携わっており、中国の障がい者スポーツの中心的な役割を担っているといえる。日本では、障がい者スポーツに特化した施設は数少ないため、上記センターのような中心的な役割を担う施設を国内に設立し、社会全体で障がい者スポーツの認識を高めることが今後求められるのではないかと考える。

【まとめ】

今回の中国リハの訪問を通じて、利用者と障がい者の家族、そしてそれらをサポートする職員の関わり方の違いなど、日本のリハセンターとの違いを多く学ぶことができた。しかし、関わり方が異なっていたとしても、利用者そしてその家族が少しでも安心して暮らすことのできるような支援を行っていくという最終的な目標は同じであるということを同時に再確認することができた。

今後、中国や日本は超高齢社会を迎え、障がい者の高齢化という問題に直面する。そのような社会では、障害福祉サービスの重要性が今以上に高まってくると思われる。そして、そのような社会を乗り越えていくためには、今回のような両国のセンター同士の意見交換といった交流がより必要になってくると今回の訪問で感じることができた。

最後に、今回の中国訪問の機会を与えてくださった関係者の皆様、そして、訪問中色々な面でサポートをしてくださった、劉さん、王さんをはじめとして私たちを暖かく迎えてくださった中国リハビリテーション研究センター、中国障害者体育運動管理センターの皆様に、心より感謝申し上げます。

中国リハセンターの入口にて

中国障害者体育運動管理センターのシンボル

中国リハビリテーション研究センターへの技術交流訪問と
中国障害者体育運動管理センターへの見学に関する報告

国立障害者リハビリテーションセンター
自立支援局　就労移行支援課　発達障害支援室
作業療法士　中村有志

〇はじめに

セラピストとしての知見や価値観を広げ、より良い医療や福祉を提供するための貴重な機会であると考え、中国リハビリテーション研究センター（以下中国リハ）を訪問し、見学と意見交換をさせていただいた。また、障害をもつ方々のスポーツに関する中国の取り組みについて興味があり、中国障害者体育運動管理センター（以下障害者体育センター）を見学させていただいた。

〇中国リハビリテーション研究センター

病床数は 1000 床、理学療法士（PT）100 名と作業療法士（OT）45 名が在籍している。脳血管障害や脊髄損傷、小児の疾患をもつ方々に対し、PT は主に下肢のリハビリテーションを、OT は主に上肢のリハビリテーションを担当しているとのことであった。また、医師が在籍している評価専門の部署があり、医師とセラピストが情報交換を行いつつ、評価やリハビリテーション計画の立案を行っているとのことであった。

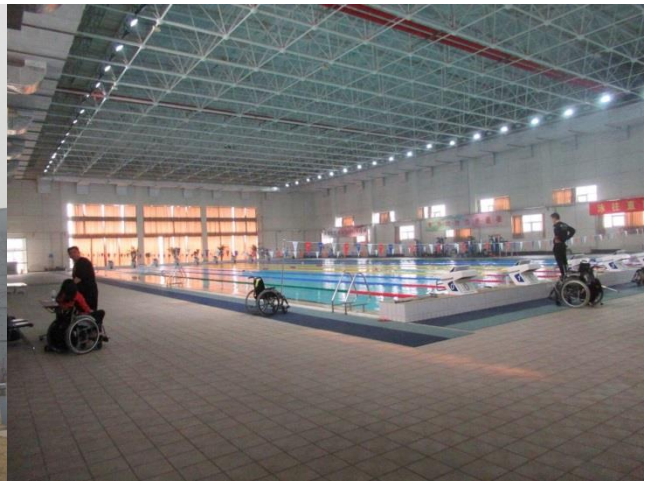
リハビリテーションを受けているほとんどの患者さんのそばでは、ご家族が見学している様子が多く見られた。同時にご家族の支援も行っているためとのことであり、PT や OT のリハビリテーション室だけでなく、院内の歩行訓練でも同様に見られるその様子は印象的であった。

見学の後中国リハの OT のみなさんと行った意見交換会では、それぞれの取り組みや今後の展望等をお話する、非常に貴重な機会が得られた。

〇中国障害者体育運動管理センター

北京空港の近くにある障害者体育センターは、6 万㎡という広大な敷地に 6 つのスポーツ施設が建ち並ぶ障害をもつアスリート専用の施設で、中国各地のアスリートがトレーニングを行えるよう宿泊施設も完備されていた。中国ではスポーツを通して障害をもつ方々への理解やバリアフリーの普及が広がっているとのことであった。

見学させていただいた日は、大会が近いこともあり競泳の代表選手達が特に力をいれてトレーニングを行っていた。水中トレーニングと筋力トレーニングがスムーズに行えるよう、プールにはトレーニングルームが併設されていた。



〇謝辞

貴重なお話を聞かせていただいた院長先生、4 日間コーディネートしてくださった劉さんと王さん、施設を案内してくださった黄さんをはじめとした中国リハの皆さまに感謝申し上げます。特に劉さんと王さんには、4 日間を通して常に親切にしていただき、お二人のおかげで貴重な経験以外に、素敵な思い出も日本に持ち帰ることができました。心より感謝申し上げます。